

第20回全国菜の花サミット in 小山「持続可能な田園環境都市をめざして」

おやま宣言

私たちは、栃木県小山市に集い、第20回全国菜の花サミット in 小山「持続可能な田園環境都市をめざして」を開催しました。

2001年に滋賀県高島市から始まり、今回で20回目の節目を迎えた「全国菜の花サミット」は、食とエネルギーの地域自立、FEC(食料・エネルギー・安心)自給の具体的な地域モデルづくりに取り組み、循環型社会形成への道筋をつけてきました。

そして、2010年に兵庫県豊岡市で始まり、2018年までに5回開催された、「生物の多様性を育む農業国際会議(ICEBA)」は、生物多様性を基盤とした地域資源循環型の農業技術の確立と国内外への普及活動を推進し、自然共生社会に向けた歩みを後押ししてきました。

私たちは、この2日間で、国際的な潮流を認識し、持続可能な社会づくりの問題提起と、これまでの取組成果と課題の報告、そして、新たな取組の展望を踏まえて、5つの分科会で意見を交わし、参加者の思いをこの「おやま宣言」にまとめました。

私たちは、この小山の地で共有した知見を広く発信し、「市民一人ひとりが主役となる持続可能な社会」をみんなで創っていく道しるべとするべく、以下のとおり宣言します。

私たち第20回全国菜の花サミットに参加したすべての関係者は、今までの菜の花プロジェクト、生物多様性を育む農業、学校給食の有機化、コウノトリ・トキの野生復帰等それぞれの分野で追求してきた取組が、循環型社会・持続可能な社会をつくる上で相互に関連し密接不可分であることを確認しました。

そして、地域においては、第1次産業を基本におく、多元的価値を実現する自然共生社会への見直しが求められる中で、私たちのそれぞれの分野での取組がこれからの地域にとって必須のものであることを確認しました。

世界中で取り組まれている2030年までの持続可能な開発目標(SDGs)では17の目標すべての実現が求められていますが、私たちの今までのそれぞれの分野での取組はより高い次元に統合されなければなりません。そして、そのためには、分野の壁だけではなく、市民、行政、企業など様々な主体の壁、都市・農村という地域の壁をも乗り越え、互いに交流し、連携していくことが求められます。

菜の花サミットは、本日この第20回をもって終止符を打ちます。しかし、私たちは、菜の花の十字花卉が象徴する「産・官・学・民の協働」を、正に今日ここから本格的に始めていくことを誓うとともに、地域において「市民一人ひとりが主役となる持続可能な社会」の実現をめざし、全国の各地方都市において、「田園環境都市」のまちづくりを確実に実践していきます。

2021年12月12日

第20回全国菜の花サミット in 小山 参加者 一同